

事例10

< 事例概要 >

- ・ 70 歳代の患者、PS ※0。死亡時画像診断 (Ai) 無、解剖無。
- ・ 主診療科、肝生検施行診療科：消化器内科。
- ・ 抗凝固薬、抗血小板薬内服中。肝嚢胞穿刺の 2 日前から休薬し、ビタミンK 投与後にヘパリン置換した。人工透析中。
- ・ 肝嚢胞の穿刺目的で、腹部超音波ガイド下で経皮的肝嚢胞穿刺術が実施された。
- ・ 肝嚢胞穿刺術後、嘔吐、胸腹部痛を訴え、血圧、経皮的動脈血酸素飽和度 (SpO<sub>2</sub>) が低下した。経過観察されていたが、意識消失、心肺停止した。腹部超音波では明らかな腹腔内出血を認めず、胃管を挿入すると動脈性と思われる血液の流出があり、肝嚢胞穿刺の翌日死亡した。(症状・検査等の時間経過詳細不明)
- ・ 生検組織診断の結果は、悪性所見を認めなかった。

※ PS (performance status) : ECOG (Eastern Cooperative Oncology Group) が定めた全身状態の指標で、患者の日常生活の制限の程度を示す